
空の騎士達

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

空の騎士達

【Nコード】

N9371B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

敗戦直前のドイツ。ソ連軍に追われる民衆を一人でも多く西へ逃がす為七人のパイロットが最後の出撃に向かう。そうして今彼等にとって最後の戦いの幕があげようとしていた。第二次世界大戦東部戦線を舞台にしたお話です。ドイツ空軍最後の輝きを御覧下さい。

第一章

空の騎士達

戦いはもう終わりに近付いてきていた。それは誰の目にも明らかであつた。

一九四五年。ドイツはいよいよ破滅の中に落ちようとしていた。東からはソ連軍、西からは連合軍が迫つて来る。北ももう連合軍のものとなり南でもアルプスに敵が迫つてきていた。かつて無敵を誇つた第三帝国もその命が尽きようとしていた。

昼も夜も爆撃機が嫌になる程の護衛戦闘機を引き連れてやって来る。それはまるで空を覆い尽くさんばかりであつた。

街が一日ごとに消えていく。首都ベルリンとて例外ではなく空に敵が見えない日はなかつた。

「諸君！戦いはこれからだ」
ラジオから放送が聞こえてくる。

「まだ戦いは終わったわけではないのだ！」

言っているのはゲッペルスであろうか。少なくともヒトラーの声ではなかつた。

「ここで耐えなければ」

「終わりだつて台詞はもう聞き飽きたぜ」

それを聴いている一人の男がそう述べた。そしてラジオのスイッチを切つた。

「どつちにしろもう終わりなんだよ」

「おいおい、そんなこと言つて大丈夫かよ」

隣にいた背の高い男がその言葉を聞いて口の端で笑つてきた。

「まずいぜ。ゲシュタポに知られたらよ」

「何だ、奴等はここの基地にもいるのか」

ラジオを切つたくすんだ金髪の男がそれに対して言った。

「親衛隊とかはいない筈だけれどな」

「相手はヒムラーだ」

背の高い男はまた言った。

「何処にどいつを潜ませているかわかったものじゃないぜ」

「ヒムラーか」

くすんだ金髪の男はその名を聞いて顔を顰めさせた。

「あいつだけは好きにはなれないな」

「ほお」

背の高い男はそれを聞いてまた口の端で笑ってきた。

「昔からな。どうしても」

「何だ、知り合いだったのか」

「いや」

だがそれは否定した。

「実際に会ったことはないさ」

「そうだろ。御前が会ったっていやあ」

彼は言う。

「太っちょの元帥様だけか」

国家元帥であるヘルマン・ゲーリングのことだ。言うまでもなくナチスの重鎮でありドイツ空軍のトップである。若い時はそうでもなかったが今ではやけに軍服が似合っていないかった。

「ああ、この勲章な」

くすんだ金髪の男はここで自分の左胸を指差してきた。

「俺の誇りさ」

「それだけじゃないだろ。中佐」

背の高い男は笑って彼を中佐と呼んだ。

「一五二機撃墜のエーリッヒ・フォン・アルトマン中佐は」

「ああ」

その男はアルトマンはその言葉に応えた。

「勲章は他にもあったが忘れたな」

「おやおや」

「ダイヤモンド柏十字は誰にもらったんだっけな」

そう嘯く。

「あれは総統からじゃなかったのか？」

「そうだったかな。多過ぎて覚えてないや」

「それはまたいいことで」

「それは御前もだろ」

アルトマンは彼にそう言い返した。

「ええ、ヘルバルト」ブラウバルト中佐」

そして彼の名を呼ぶ。

「一四〇機撃墜の大エースが」

「何、大したことはないさ」

だが彼はその言葉にこれといって反応を示さなかった。

「御前さんに比べればな。微々たるものさ」

「何処がだよ」

アルトマンは笑ってそう返す。

「それだけ撃墜しておいてよ」

「ノボトニー大佐程じゃないさ」

ドイツ軍の伝説的エースの一人である。生涯撃墜数二五八機という信じられない記録を残している。もともとドイツ軍は三五〇機撃墜という記録の持ち主もいるのであるが。

「俺の記録なんてよ」

「よく言う」

アルトマンはそんな彼に対して述べた。

「そこまで撃墜してりゃ本物だぜ」

「本物が」

「ああ。その証拠に今も生きてるじゃないか」

「まあな」

その言葉には頷いた。

「それが何よりの証拠さ」

「だといいがな。けれどな」

「何だ？」

「まだ飛べるのかね」

ブラウバルトはシニカルな笑みと共にそう言った。

「この状況で。どうなのかね」

「まだ大丈夫だろ」

アルトマンは彼にそう返した。

「俺達の方はまだな」

「俺達はか」

「ああ。レシプロの連中はもう殆ど駄目らしいがな」

「そうらしいな」

ブラウバルトはアルトマンの言葉にまたシニカルな笑みを浮かべてきて応えた。

「それでジェット機やロケット機がかえって活躍できる」

「それも数は滅多にないがな」

「やけに引つ掛かる物言いだな」

「本当のことだろ？」

それでもブラウバルトは悪びれた様子もない。

「誇り高き無敵にルフトバツフェももうその面影すらねえ。ここ
基地だつて何機あるよ」

「七機だ」

アルトマンは答えた。

「そしてパイロットも七人だ」

「かつてはここに数え切れない程の戦闘機とパイロットがいたのに
それだぜ。それが何よりの証拠だろ」

「ああ」

残念だがそれを認めるしかなかった。

「これが現実なんだよ。今のドイツもな」

「もうすぐ終わりか」

「それしかないだろ」

何時の間にかブラウバルトの顔からあのシニカルな笑みが消えて
いた。惘然としたものになっていた。

「もうここまでイワン共が来てるしな」

「そうだな。ベルリンももうすぐ終わりか」

「今丁度ドンパチやってる頃だと思っぜ。援護に行くか？」

「パパのか」

グライム元帥のことである。ドイツ空軍の重鎮であり『パパ』と呼ばれて将兵に親しまれている人物である。能力だけでなく人望も備えていた人物である。

「もう自害されてると思うがな」

「じゃあ止めだな」

「どうしたらいいんだ？」

アルトマンは俯いてそう述べた。

「俺達は。このまま負けるのか」

「負けるのはもう確実だろ」

ブラウベルグの言葉は何処までも冷めたものであった。

「こんな状況で勝てると思うか？」

「いや」

彼も伊達に将校をやっているわけではない。それはわかる。

「無理だな」

「そうだろ。じゃあジタバタしても仕方ないだろ」

「ジタバタしてもか」

「そうさ。今更な」

「じゃあどうするっていうんだ？」

「近いうちに話があるぜ」

ブラウベルグは表情を消したまま言ってきた。

第二章

「何かの話がな」

「そうか。それじゃあ」

「ああ。それまで待てばいいさ」

「他の面子にも話しておくか？」

「いや、それには及ばんさ」

それは止めてきた。

「どうせな。すぐだ」

「すぐか」

「どっしりとしてればいいさ。それで最後の出撃に向かえばいいさ」

今の戦況では本当に最後になるかも知れない。その危惧の中で話をしていた。実際にそのジェット機の燃料もあと一回出撃できるかどうかといった有様であったからだ。ドイツはそこまで追い詰められていたのだ。

「じゃあ飲みに行くか」

「飲むのか」

「ああ。嫌なのか？」

「いや」

その言葉に首を横に振る。

「何かな。気分を晴らしたくなった」

彼は述べた。

「きつい酒がいいな。すぐに酔えるのがいい」

「ビールじゃなくてか」

「もうビールはあまりないだろ」

敗戦が続く物資が不足してきたのだ。それがわかっているから、その言葉だった。まずなくなっていくのはそうした嗜好品からだ。当然の成り行きであった。

「あるのでいい」

「さもしいね、何か」

「飲めるだけまだましだろ」

今度はアルトマンが冷めた目になっていた。

「今の状況じゃ」

「それは俺の言葉だぜ」

「ああ、そうか」

応えても何処か虚ろであった。

「まあいいじゃないか。それじゃあ行こう」

「そうだな。あるのを適当にな」

「ああ」

二人は席を立った。そしてその足で基地にあるバーに向かうのであった。

バーにいる人間はまばらであった。敗北間近の御時世のせいかな飲んでる者もかなり酷い飲み方をしていた。見ればその飲んでる連中は彼等の同僚であった。

「よお」

「よおって御前」

アルトマンはその赤い鼻の男に顔を向けてすぐに苦い表情になった。そこにいるのはこの基地のパイロットの一人エクゼル・ハイトウングであったのだ。彼も階級は同じでやはり歴戦のエースである。歴戦のエースがバーで飲んだくれていたのだ。

「何だ、そんなに酔って」

「酔ってちや悪いのか？俺が」

彼は真っ赤な顔を向けて彼にそう言ってきた。

「たまには俺だって飲みたくはなるさ」

「そうか」

「ああ」

普段彼は殆ど飲まない。その彼が泥酔している。やはりそれだけ今が酷い有様ということなのである。

「で、何飲んでるんだよ」

「適当にな」

ブラウベルグに答えた。

「飲んでるさ」

「そうか」

「ああ、クーレーデンやホルゼナツハも一緒だぜ」

「あいつ等は何処だ？」

「ん！？ああ」

見れば床に二人転がっていた。赤毛の男と小柄な男がである。

「そこに」

「何なんだよ、この有り様は」

「何かな。話してるうちに飲みたくなってな」

ハイトウングは語る。

「それでだよ」

「滅茶苦茶だな、何か」

「別にいいだろ。今日は何もなかったしな」

「まあな」

ブラウベルグがそれに答える。

「今日はな」

「けれどよ」

アルトマンがここで言った。

「もうすぐそこに來てるぜ。わかってるよな」

「イワンがだろ」

「ああ、そうだ」

ハイトウングに深刻な顔と共に答えた。

「その通りだ。ここにも遂にな」

「難儀なものだな。数年前はこっちがモスクワまで來ていたってのにな」

何か色々なものを入れたジョッキの中のものを口に含んでから言う。

「それがどうだ。今じゃベルリンだってやばいぜ」

「やばいってものじゃないだろ」

ブラウベルグはあのシニカルな笑みをまた浮かべて述べてきた。
「もう終わりさ」

「終わりか」

ハイトウングはその言葉を聞いて手を止めてしまった。ジョッキの中の酒が空しく波を作ったがそれはすぐに収まった。まるで彼等の話を聞くかのように。

「ベルリンに聞こえてるらしいぜ。パイプオルガンの音が」

「スターリンのあれだな」

「そうさ、まるでレクイエムみたいにな」

ロシア軍のロケット掃射の音である。そのあまりの攻撃の激しさにドイツ軍の将兵達はその攻撃をスターリンのパイプオルガンと呼んでいたのである。

「派手にやってるらしいぜ」

「神様は信じないんだろ、奴等は」

ハイトウングは言う。それでどうしてレクイエムなのだ。

「それはそれ、これはこれらしいな」

ブラウベルグはそう言い返す。

「俺達を地獄に送る為に奏でてくれてるんだろっさ」

「いらねえな、そんなお節介は」

「まあな」

誰もそんなものは欲しくもない。答えは決まっていた。

「しかしベルリンもそうだと」

「今あそこは修羅場だろうな」

「じきにここもこうなるぜ」

ブラウベルグはまたシニカルな言葉を口にした。

「イワン共がもうすぐ側だぜ」

「それで陸軍が必死に戦ってるんだな」

ハイトウングは述べた。

「国民を一人でも多く後ろに逃がす為に」

「そういうことだ。あいつ等の方がましだろ」

ブラウベルグはここであいつ等と誰かのことを口にした。

「まだな」

「程度の問題だろうがな」

アルトマンの声は実に苦いものだった。

「ヤンキー共も大概なものだぜ」

「それでもポリシェヴィキのイワン共よりましさ」

ブラウベルグはそう言う。

第三章

「あいつ等は人間じゃねえ。獣だ」

「確かにな」

これにはアルトマンもハイトウングも同意であった。ソ連軍の暴虐は彼等も嫌になる程知っていた。皆ソ連軍との戦場である東部戦線に参加していたからだ。そこはまさに地獄であったのだ。

「あいつ等だけはな」

「自分達は解放者だって言ってるらしいがな」

「馬鹿言え」

ハイトウングはそれを真つ先に否定した。

「あの連中が解放者なわけがないだろ」

「じゃあ何なんだ？」

「御前がさつき言っただじゃねえか」

「獣か」

「そうさ」

ハイトウングはそう述べてまたジョッキの中の訳のわからない酒を飲んだ。

「本当にまだヤンキーの方がましかもな」

「そうだな。ヤンキーもすぐそこまで来てるそうだけ」

「そうなのか」

ハイトウングはそれは知らなかったらしい。それを聞いて目をしきりに動かさせていた。

「あいつ等もかよ」

「東と西からな」

「何かドイツがどんどんなくなっていくてるんだな」

その通りであった。東からはソ連軍、西からは連合軍が迫ってきている。それが何よりの証拠であった。第三帝国は今地球から消えようとしているのだ。

「終わりだな、俺達も」

「まだそうと決まってるわけじゃないだろ」
アルトマンがそう言った。

「戦争に負けてもまた戦えばいいだろ」

「そう上手くできるかね」

しかしそれに対するハイトウングの言葉は悲観的なものであった。

「ここまでこてんぱんにやられてよ」

「まあまずは生きること考えようぜ」

ブラウベルグはここで現実的な言葉を述べてきた。

「話はそれからだ。それでな」

「ああ」

話が変わった。

「こいつ等は生きてるのか？まだ」

「酔い潰れてるだけさ」

ブラウベルグとハイトウングはクルーデンとホイゼナツハを見ながら話をした。

「明日の昼になれば蘇ってるだろ」

「明日かよ」

「そうさ。どうもこの酒が悪かったらしい」

そう言って今自分が手に持っているジョッキを見る。

「結構いけるんだがな」

「そりゃそんなの飲んだらまずいだろ」

アルトマンは言った。

「一体何入ってるんだ、そこに」

「色々さ」

細かいことはハイトウング自身にもよくわからないものであるらしい。返答は真に要領を得ないものであった。ただ、何種類もの酒が混ざった滅茶苦茶なカクテルであることだけはわかる。

「色々かよ」

「それ以外に言い様がねえな」

「まあこんな御時世だからな」

ブラウベルグの言葉はここでも達観したものであった。

「飲めりゃいいってわけか」

「飲めるだけでした」

ハイトウングはまた言った。

「まだ生きてるってことだからな」

「どうせなら最後まで生きたいよな」

アルトマンは表情を変えずにこう述べた。

「最後の最後まで」

「どうか。何でも戦犯追及までやるんだろ？」

ブラウベルグは今度はそれを言ってきた。

「ナチスの関係者は全員」

「俺達はナチスじゃない」

アルトマンはそれをすぐに否定した。それは自信を持ってはつきりと言えた。

「違うか？ 違うないだろう」

「どうか。敵にとっちゃ必要なのは事実じゃないからな」

「どういうことだ？ それは」

アルトマンは後ろからの声に応えた。そこには二人の男がいた。

グイーラントⅡヘンドリックとヨハネスⅡシュトラウスであった。

それぞれ緑の目と茶色の髪が印象的だ。彼等もまた撃墜数百機を越える歴戦のエースである。そうした意味では今床に転がっているカールⅡクルーデンモルドルフⅡホイゼナツハも同じなのであるが。

彼等がこの基地のパイロット達である。歴戦のエース七人。それが基地の戦力の全てであったのだ。もっとも彼等は今將に滅びようとしている帝国の傷ついた鷲であったが。

「だから言ったままさ」

ヘンドリックは述べた。

「連中はな、要するに正義ってのが欲しいのさ」

「正義か」

「そうさ、まあ俺達は悪者になる」

ヘンドリックの言葉の響きはブラウベルグのそれよりもシニカルに聞こえる。だがそこには妙な達観まであった。

「それであいつ等が正義になるんだ」

「イワンが正義かよ」

ヘンドリックの横にいたシュトラウスはそれを聞いて顔を顰めさせた。

「また奇天烈な話だな」

「勝てば白でも黒になるさ」

ヘンドリックの言葉がよりシニカルな色彩を強いものにさせた。

「赤旗も正義の旗になるってな」

「そういうものか」

「そうさ。それで俺達は悪者として裁かれる」

「ナチス以外にもか」

「理由は何とでもなるんだよ」

ヘンドリックはまた述べた。

「上空から一般市民を撃つただの捕虜を虐待したただのな。下手したら階級だけでどれだけ殺したとかあらかじめ決められるかもな」

「馬鹿な」

だがアルトマンはそれを否定した。

第四章

「幾ら何でもそんなことが」

だがこれは実際にあつた。ユーゴスラビアでは階級に応じてどれだけの人間を殺したのかを決めていたのだ。それを認めないと拷問が待っていたのだ。それが現実であつた。ニュルンベルグ裁判の実態はそもそも法律的にあつてはならない事後立法である。最初からが異常だつたので当然の話でもあつた。なおこのニュルンベルグ裁判を単なる戦争犯罪に適用したのが極東軍事裁判である。この裁判はおそらく人類史上稀に見る異常な裁判であろう。この二つの裁判は既に判決が決まっていたということも見逃せない。ヘンドリックの言葉は正しかつたのだ。

「あるんだよ。実際に俺の同僚がそれでポリシェヴィキに殺された」
「もうか」

「そうさ。収容所の将校だつたつてだけでな。一千人殺したことになるつてな」

「何て話だ」

「けれどよ」

ここでシュトラウスが口を開いた。

「それでも俺達は軍人だろ。やっぱり最後まで」

「ああ、戦うしかない」

これはアルトマンにとつては容易に受け入れられることであつた。

「それはな」

「明後日位だろうな」

ここでハイトウングが言った。

「明後日か」

「来るぜ、イワン共が空からよ」

ヘンドリックはクールな声でアルトマンに応えた。

「いつもみたいに馬鹿みたいな数でな」

「数か」

「そうさ、数だ」

シュトラウスは言う。

「イワンの数は伊達じゃねえだろ。またそれで来るぜ」

「芸のない奴等だな、全く」

ブラウベルグはそれを聞いて言った。彼の言葉はシニカルなものになっていった。

「最初から最後までそれじゃねえか」

それがソ連軍の戦い方であった。昨年のパグラチオン作戦では何と六倍の戦力で攻勢をかけドイツ軍の主力であった中央軍集団を崩壊させたのである。ソ連という国の力を発揮させた戦いであった。

「けれどそのせいで俺達はここまでやられた」

「まあな」

ブラウベルグもそれは認めるしかなかった。

「奴等は街を一つずつ消しながらこっちに来ている。ベルリンみたいにな」

「ベルリンと同じか」

ハイトウングはそれを聞いて暗い顔を見せてきた。

「あそこじゃとんでもないことになってるんだろうな」

「そうだろうな」

ソ連軍の凶悪さを考えるとこれはすぐにわかることであった。東部戦線にいた彼等はソ連軍のその悪質さを骨身に滲みて知っていた。

「奴等のことだからな」

「それでだ」

シュトラウスがまたヘンドリックに問うた。

「今戦線はどうなんだ？」

「わかると思うがね」

その返事だけでわかるのが今の惨状である。

「陸軍ももう数がない。必死に一般市民を逃がしてるがな」

「そうか」

「西にな。結構逃げてるそうだけ」

「頑張ってくれてるんだな」

「ああ。海軍の偉いさんも言ってるらしい」

「海軍!？」

皆それを聞いて顔を顰めさせた。

「陸軍でも空軍でもなかいのか」

「そうさ。ええと、確か」

ヘンドリックはここで記憶を辿った。それから述べた。

「デーニッツ海軍元帥だったな。あの人が言ってるらしい」

「誰だった?その人」

シュトラウスはその名を聞いてもどうもピンとこなかった。自分のいる組織以外のことは人間は案外知らないものだ。だからこれは致し方のないことであつた。

「さあ」

アルトマンもブラウベルグも知らない。彼等も海軍のことは知らないのだ。陸軍のことはよく協同作戦をとるのである程度知ってはいたが。なおドイツは政治的な理由と思想的な理由で陸軍と空軍の関係は決していいものではなかつた。これはナチスのナンバーツーであるゲーリングが率いる空軍が何かとヒトラーの覚えめでたかつたのに対して伝統的なプロイセン軍の精神を持つ陸軍がその介入を嫌つたからである。陸軍は陸軍で名将知将を多く擁しておりヒトラーもその能力を認めていた。だがここでヒトラーが恐るべき政治家である理由はその陸軍と空軍をあえて対立させそれを自身の政権運営や戦略の進め方に利用したことである。ヒトラーという人物は軍事的には大いに問題のある人物であつたが少なくとも政治家としては悪魔的に頭の切れる人物であり続けた。そのカリスマ性と比類なき統率力、常人のそれを遥かに凌駕する知性と記憶力もあり彼は英雄となつたのである。やはり彼は恐るべき人物であつたのだ。

「海軍長官だろ」

ハイトウングが言った。もうジョッキは空で別のジョッキに手を

かけている。

「確か潜水艦艦隊の指揮官で」

「ああ、その通りさ」

ヘンドリックは彼の問いにそう答えた。

「その人だ」

「その人が言ってるのか」

「総統にもそう言ってるらしい。それで総統もそれを認められてる
そうだ」

「へえ」

アルトマン達はそれを聞いて意外といった顔になった。

「凄い人みたいだな、また」

「別にその人は最初からナチスにいたわけじゃないんだろ？」

「それでもな。総統も元帥をかなり信頼されてるって話だ」

ヘンドリックはアルトマンとシュトラウスにこう答えた。

「一人でも多く西に逃がすべきだってな。それで今陸軍は必死に戦
ってるんだ」

「そうか、陸軍もか」

「だから俺達も出ることになるぜ」

ヘンドリックは述べた。

「じきにな。それで」

「ああ、それで多分最後だろうな」

アルトマンは暗い顔で述べた。

「もう燃料も弾薬もないしな」

「最後の全力出撃か」

「そうさ、用意はいいな」

ヘンドリックはシュトラウスとハイトウングに声をかけた。

「全力でいくことになるぜ」

「それが最後の大暴れか」

ブラウベルグはその言葉を聞いて面白そうに述べた。

「ああ、そうだろうな」

「じゃあ精々派手に暴れてやるさ」

「そうだな、最後なら」

ヘンドリックの言葉を聞いてブラウベルグは笑いアルトマンは覚悟を決めた。

「やってやる」

「一人でも多くな。西に逃がそう」

シュトラウスも同じだった。意を決した顔を見せている。

「西にな」

「よし。じゃあ」

ハイトウングも酒を止めていた。そして応える。

「まずはこの二人を酒から醒ましてな」

「そうだな。おい」

アルトマンが二人に声をかけた。

「起きろよ」

「こんなところで寝ていたら風邪ひくぞ」

他の仲間達も二人の側に寄ってきた。そして二人に声をかけるのであった。

第五章

ハイトウングの予想は当たった。その日から二日後彼等は基地司令から作戦の報告を受けていた。

「そうですか、遂に」

「そうだ」

基地司令であるノツヘンバツク中將はアルトマンの言葉に応えていた。見ればそこには七人のパイロットが集まっていた。クルーデンとホイゼナツハも二日前の酒を抜いてそこにいた。

「おそらくこれが最後の出撃になる」

「はい」

七人のパイロットはその言葉に頷いた。

「出撃して帰る場所はここではない」

「じゃあ何処ですか？」

ホイゼナツハがそれに問うた。

「ここじゃないっていうと」

「西だ」

司令はこう答えた。

「西ですか」

「そうだ。諸君等も戦闘が終わったら西に向かえ。いいな」

「それで西の基地に入らってことですか」

「今度はクルーデンが問うた。

「基地は放棄ですか？」

「うむ。諸君等が出撃した後はな。我々も西へ向けて後退する」

司令は硬い顔と声で言う。そこから感情を窺い知ることにはできない。

「わかったな。それでは」

「はい」

アルトマンがそれに応える。

「わかりました。ではそういうことで」

「うむ、頼むぞ」

「それで司令」

今度はブラウベルグが尋ねた。

「俺達の攻撃目標は何ですか？戦闘機ですか？攻撃機ですか？」

「戦闘機だ」

それに対する司令の返事はこうであった。

「ヤクですか」

「そうだ。今のところ連合軍の機体は来てはいない」

「それが救いですかね」

シユトラウスは連合軍の機体がないということ聞いてまずは安心したようであった。

「イワンの機体とパイロットならね。まだ楽ですよ」

「数を聞いてそれが言えるかな」

だが司令はそんな彼に対してこう述べた。

「何機なんですか？」

「百機だ」

司令は言った。

「数で十三倍、どうだ」

「まあ大した数じゃないですね」

だがそれには誰も驚かなかった。ブラウベルグなどはわざと軽い調子でそう述べた。

「レシプロでしょう？相手は」

「まあな」

「それにイワンのパイロットなんて下手糞揃いじゃないですか。怖くとも何ともないですよ」

「そう思っのか？」

「だから生きてきたんですよ、今まで」

今のブラウベルグの言葉にはシニカルの他に自信もあった。むしろそちらの方が強いとさえ言えた。それが言葉から見て取れた。

「違いますか？」

「では数は問題ないのか」

「そういうことです。イワンが相手なら何機でもね」

「そうか。では多くは言わん」

司令はそれを聞いてここは彼等に任せることにした。そしてまた述べた。

「では出撃だ。それでいいな」

「了解」

ホイザナツハがそれに応えた。

「じゃあ後は任せて下さい」

「ここはドイツですからね」

グルーデンも言った。

「イワンの好きにはさせませんよ」

「そうでありたかったな、最後まで」

だがそれに対する司令の言葉は寂しいものであった。

「全く。こんなことになってしまつとは」

「言っても仕方ありませんよ」

今度はヘンドリックが言う。

「今更何を言つてもね」

「そうか」

その言葉は司令を落胆させるには充分であった。だが彼はそれでも述べた。

「しかしだ」

「ええ」

七人はそれに応える。

「最後の最後まで戦うのがな。ドイツ人だ」

「そういうことですな」

シュトラウスの目が光った。

「じゃあ行って来ます。最後の一弾までね」

「頼むぞ。ただしだ」

「ただし!？」

「誰も死ぬな」

これが司令の最後の願いであった。

「いいな、最後まで生き残るんだ」

「これでルフトバツフェは終わりなんじゃ」

ハイトウングがそれに問う。

「もうこれで」

「それでもだ」

だが司令はそれでも彼等に対して言う。

「生きる。また戦う時が来るかも知れない」

「わかりました」

七人はそれに頷く。そしてアルトマンは言った。

「けれど司令」

「何だ？」

「今度戦争する時は」

「ああ」

司令は彼の話に耳を傾ける。アルトマンも話を続ける。

「イワンにもヤンキーにも。誰にもドイツの空は自由に飛ばせませ
んよ」

「そうだな」

司令は彼のその言葉に頷いた。

「きつとそうしよう。では」

「ええ」

七人は一斉に立ち上がり敬礼を司令に送る。

「出撃します」

「健闘を祈る」

彼等は互いに敬礼した。ドイツ式の敬礼であった。それは確かに
ナチスの敬礼である。だがそこにあるのは。紛れもないドイツの心
であった。

そのドイツの心を持つ七人の騎士が大空に旅立った。基地の者達

はそれを見届けるとすぐに慌しく撤退の準備に取り掛かった。

「おい、急げ」

「アルトマン少佐達が戦っている間に退くぞ」

「ああ」

彼等は口々に言い合い車に乗っていく。機器は破壊し滑走路はダイナマイトで壊し使えなくした。そうしてから撤退していくのであった。

第六章

「さあ司令」

最後の車に司令が乗り込む。幕僚達もその周りにいる。

「我々ももう」

「わかった。それでは頼むぞ」

「はい」

運転手がそれに応える。彼等は今トラックに乗り込んでいく。所々で爆発が起こり廃墟になっていく基地を後にして。

「西に入ったらな」

「ええ」

司令はトラックの後ろに乗りながら幕僚達に話をしている。彼等はそれを聞いている。

「降伏するぞ、いいな」

「降伏ですか」

「そうだ、それでいいな」

「わかりました」

幕僚達は力ない声でそれに頷いた。

「今は生きるんだ、いいな」

「何があってもですか」

「彼等にも言った」

あの七人に言ったことを今伝えた。

「生きるとな」

「命あつての物種つてことですか」

幕僚の一人が硬い表情で尋ねてきた。その顔には疲れと諦めの色が濃く現われていた。

「まずはそれで生き延びて」

「そうだ、それしかない」

彼はその幕僚にもあえて言い聞かす。

「まずはな。生きるんだ、いいな」

「了解」

「生き残ったらどうしますか？」

「話はそれからだな」

彼は沈んではいるがはつきりとした声でこう述べた。

「何もかも」

「そうですか」

「とにかく生きろと」

「いいな、絶対に死ぬな」

またその言葉を繰り返す。

「この有様が悔しいのならな。余計に」

「そうですね。それじゃあ何があっても生きてやりますよ」

幕僚の中で最も若い者がこう述べた。

「イワンもヤンキーも見返す時が何時か来ますから」

「俺達が駄目なら俺達の子供や孫がね」

別の幕僚がそれに合わせて言った。

「やってくれますからね。だから」

「そうだ、わかったな」

「了解」

「生きてやりますよ」

「うん、頼むぞ。私の最後の命令だ」

そう言ったところで車が発進した。今彼等は生き残り、次の戦いの為に撤退をはじめたのであった。

七人は空を駆っていた。アルトマンを軸としてブーメラン形の陣を組んでいる。それは本来のドイツ軍の飛行陣形であるダイヤモンドとは違っていたが彼等は意には介していなかった。

「なあ」

その中でシュトラウスが口を開いてきた。

「そろそろだよな、イワンが出て来るのは」

「ああ、そうだな」

それにブラウベルグが応える。

「下にいるな、多分」

「そうか、じゃあ」

「ああ、発見次第急降下を仕掛ける。後は」

「いつも通りだな」

「そういうことだ」

アルトマンは仲間達にそう述べた。

「司令は生きて帰れって言ってるがな」

「百機だろ？楽勝だろ」

ハイトウングにホイゼナツハが声をかけてきた。

「そんなのイワンとの戦争だったらざらだったじゃねえか。スター

リングラードでもそうだったろ」

「まあな」

ホイゼナツハに言われてそれに頷いた。

「じゃあ腹括ったな」

「よし」

ハイトウングはあらためて応えてきた。

「来たぜ」

そしてクルーデンが皆に言ってきた。

「下だ、丁度真下だ」

「あれか」

皆それを聞いて下を見る。そこにはソ連軍の戦闘機達がいた。

「確かにな。あれだ」

「へっ、もう敵がいらないと思って我が物顔だぜ」

ヘンドリックはそれを見て口の端を歪めて述べた。

「調子に乗ってくれてるな」

「いいじゃねえか。今のうちだぜ」

クルーデンがそれに言う。

「今すぐドイツの空から叩き落してやるからよ」

「しかもこっちはジェット機だ。やれる」

ホイザナツハも言う。

「じゃあいいな。おい」

ブラウベルグがアルトマンに声をかけてきた。

「仕掛けるな」

「ああ、皆このまま急降下だ」

アルトマンは他の六人に対してそう言った。

「それでいいな」

「異論はないさ」

「それが一番だからな」

「じゃあな」

彼は仲間達の声聞き頷いた。そして彼がまず機首を下げてきた。

「行くぞ！」

「ああ！」

それに続いて六機のメツサーシュミットが続く。

「これで最後だ！」

「イワン共、勝ち戦だからって調子に乗るんじゃねえぞ！」

七人の騎士が今空から襲い掛かる。ソ連軍が彼等に気付いた時に

はもう手遅れであった。

「上空に敵機！」

「何っ、まだいたのか！」

指揮官はそれを聞いて驚きの声をあげた。

「何処だ！」

「上です、真上！」

「クッ、散開しろ！」

彼はとりあえずはそれを命じた。

「そして一撃目をやり過ぎせ！いいな！」

「だ、駄目です！」

だがその命令に対する返答は絶望的なものであった。

「ま、間に合わな………うわあっ！」

「コルチャコワ！」

だが返事はなかった。コルチャコワと呼ばれたパイロットの乗ったヤクは炎に包まれ大地へ落ちていく。それと同時に七機のメッサ―シュミットがその槍で敵を屠りながら姿を現わした。

「ジェット機！」

「よりによって262か！」

「イワン共、地獄に送ってやるぜ！」

七人はドイツ語でこう彼等に言った。

第七章

「御前等は地獄を信じないそうだがそんなことは構わねえ！」

共産主義者は神を信じない。あらゆる宗教を否定する。その為地獄というものを信じないのだ。無論天国も信じはしない。これはマルクスが神を否定していたからであるがそもそもそのルールにあるジャコバン派が信仰を否定していたことも大きい。実はこのソ連にしろ今彼等が滅ぼそうとしているナチスにしろそのルールにはジャコバンがある。彼等の正体はロベスピエールでありナチスとソ連は双子であったのだ。

「地獄へ送ってやる！覚悟しな！」

「敵の数は！」

「七機です！」

部下の一人が指揮官に報告する。その間にも七人は荒れ狂いヤクを次々と叩き落していた。恐るべき速度で突撃し三〇ミリを放ち一撃で屠っていく。まるで馬を飛ばし振り向き様に斬り捨てる騎士のようになだ。

「七機にこんなにてこずっているのか！」

「しかし相手はジェット機のうえに腕が」

「言い訳はいい、同志！」

指揮官は激昂してこう叫んだ。

「早く彼等を倒せ！いいな！」

「は、はい………うわあっ！」

「マレンコフ！」

だが返事はなかった。彼もまた撃墜されたのであった。指揮官の目にきりもみ回転をしてバラバラに散っていくヤクが映った。それは中空で爆発しそのまま破片となっていた。

「何て奴等だ………」

「隊長、損害が二割を超えました！間も無く三割です！」

「囲め！」

指揮官は混乱する頭でそう叫んだ。

「数ではこっちが有利だからな！」

「で、ですが！」

「言い訳はいいと言っているだろう！ラーゲリ送りになりたいのか！」

「い、いえ！」

ソ連における死の言葉であった。ソ連では収容所送りが日常になっていた。そこで多くの者が命を落としている。これがソ連の実態であった。

「わかつたら早く動け！どっちにしろだ！」

「隊長、後ろです！」

「何っ！？」

その声に気付くと既に後ろに一機のメッサーシュミットがいた。アルトマンの機であった。

「なっ、何時の間に」

「油断していたか狼狽していたかは知らないが」

アルトマンは突然のことで時間が止まったかのように動きがないそのヤクを見ながら呟く。

「消える。ドイツの空からな」

そう言うのと機関砲を放った。それを後ろから受けた隊長のヤクはまるでコマ送りのように砲弾を浴び火を吹いていく。そして炎の中に包まれ爆発四散した。

そのヤクを屠ったアルトマンは上空に上がった。そこからまた攻撃に移ろうというのだ。

「た、隊長が……」

「あっという間に……」

生き残っているパイロット達はそれを見て完全に戦意を喪失した。指揮官を失ってはそれを防げる者もいなかった。

「に、逃げる！」

「違う！転進だ！」

必死に言い繕ってその場を逃げ去っていく。後には七機のメッサ
ーシュミットがいるだけであった。

「逃げたか」

「何だ、思ったより歯応えがなかったな」

クルーデンの言葉にシュトラウスがこう返した。

「所詮イワンはイワンってことか。下手糞揃いだぜ」

「そうだな。しかし」

「ああ、わかつてるさ」

シュトラウスはアルトマンの言葉に応えた。

「これで終わりだな」

「そうだな。西へ向かおう」

彼は仲間達にそう促した。

「俺達の戦闘は終わりだ。後は」

「連中が陸軍の援護をしてか」

彼等の目の前にスツーカーの編隊がいた。陸軍の援護に向かってい
るのだ。

「そうだ。それで全て終わりだ。俺達ルフトバッフェは」

「これでか」

「ああ。これでな」

ハイトウングに応えるアルトマンの言葉には何の感情もなかった。
込めるつもりもなかった。

「何もかもだ」

「スツーカーの護衛は？」

「あの連中がするみたいだな」

見ればスツーカーの上にはフォックケウルフがいた。

「あいつ等がな」

「そうか。じゃあ俺達は終わりだな」

ホイゼナツハがそれに応える。

「そういうことだ。じゃあ西に向かうぞ」

「わかった。ところでよ」

「何だ？」

ヘンドリックの言葉に応じてきた。

「これで終わりなんだよな」

彼はまたそれを言ってきた。

「俺達の戦いは」

「……ああ」

アルトマンの声は沈んでいた。

「そうだな。もうこれで」

「ドイツもか」

「……かもな」

それを否定することは無理だった。今の状況では。

「もうベルリンもな。今頃は」

「そうか」

「けれどな」

それでも彼は言う。

「次があるだろう」

「次か」

「生きている限りな。次がある」

彼はそれを言う。

「何度でも戦えるさ、生きている限りな」

「生きていれば」

「ああ、だから西へ行くんじゃないか」

ヘンドリックだけでなく他の仲間にも言った。

「そうじゃないのか」

「そうか」

「そうだ。だから行くぞ」

「よし、じゃあ西へ入ったら不時着だ」

ブラウベルグが言う。

「それでいいな」

「ああ。じゃあ行くぞ」

「よし」

「ドイツはもう負けだ」

アルトマンはそれはわかっていた。他の者達もだ。

「けれどな」

それでも彼は言う。

「生きていればな」

「生きていればか」

「また戦える。そして今度こそは」

「イワンもヤンキーも見返してやる。そうだな」

「そうだ。じゃあ西だ」

「生きる為に」

「また戦う為にな」

彼等は翼を翻した。そのまま西へと消えていく。ベルリンが陥落しようとし、ヒトラーも自ら命を絶つ。そんな中での最後の戦いを終えて。次の戦いの為に今は生き残るのであった。大空の騎士として。

空の騎士達 完

2006・12・1

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9371b/>

空の騎士達

2009年6月15日22時01分発行